

Christopher Boehm

Moral Origins: The Evolution of Virtue, Altruism, and Shame

Basic Books, 2012

立木 教夫

一 はじめに

本書は、南カリフォルニア大学のジェーン・グドール研究センター長で、人類学・生物科学教授のクリストファー・ベームが、進化的観点に立って道徳起源論を展開した記念碑的著作である——本文三六二ページ、注・文献・索引が五六ページ、合計四一八ページ。ベームはグドールのもとでチンパンジーの研究を行い、それを基盤として人類学の研究に入った進化人類学者である。本書ではフィールド調査と理論的研究を織り交ぜ、道徳起源のシナリオを提示している。

次に、全体の内容を概観できるように、目次を掲げておくことに

する。

- 1 ダーウィンの内なる声 (Darwin's Inner Voice)
- 2 有徳な生活を送る (Living the Virtuous Life)
- 3 利他主義とフリーライダーについて (Of Altruism and Free Rider)
- 4 われわれの直近の祖先を知る (Knowing Our Immediate Predecessors)
- 5 立派な祖先をよみがえらせる (Resurrecting Some Venerable Ancestors)
- 6 自然の「エデンの園」 (A Natural Garden of Eden)

- 7 社会選択のポジティブな面 (The Positive Side of Social Selection)
 - 8 世代を越えて道德を学ぶ (Learning Morals Across the Generations)
 - 9 モラル・マジョリティの働き (Work of the Moral Majority)
 - 10 更新世における変動と衝突 (Pleistocene Ups, Downs, and Crashes)
 - 11 評判による選択仮説をテストする (Testing the Selection-by-Reputation Hypothesis)
 - 12 道德の進化 (The Evolution of Morals)
- 終章 人類の道德的未来 (Humanity's Moral Future)

*
 原題の「起源」を表わす言葉には、Originsと複数形の「s」がついている。⁽¹⁾つまり、道德は、一回の起源で出現したものではなく、何回も起源を積み重ねて、今日の道德と呼ばれる形態に到達したことがわかる。道德は、複合的要素からなる総体であり、構成要素が順次人類集団の中に定着してくるプロセスが、人類の道德進化なのである。

*
 本書に注目した理由は、先に発表した「認知神経科学と進化生物学の出会いが拓く 道德の科学的研究」⁽²⁾において、進化生物学の観点を踏まえると、道德起源に関して次のようなパースペクティブが開けるのではないかと述べておいたが、この点に関して、より具体的な研究成果が得られると思ったからである。

「進化生物学的立場は、「道德に関して」「なぜそのメカニズムが存在しているのかということに焦点を合わせ、「自然」選択や他の進化的な力によって、そのメカニズムが現在のものようになった原因を説明する」⁽³⁾のである。これにより、「なぜ人は道德的に判断し、行動するのだろうか?」、「なぜ道德は人類集団の中に存在するのだろうか?」、「なぜ道德は人類集団の中に誕生したのか?」といった、「why」に関する問いを、設定することが可能となる。

さらに、進化生物学的アプローチでは、「道德判断および道德行動は、どのような具体的・適応的な情報処理問題を解決しようとしているのか?」、「これらの具体的・適応的な問題は、人類の祖先が生活していた環境において、どのような感情的・認知的情報処理メカニズムによって解決されてきたのか?」⁽⁴⁾と

いった、より具体的な問いとして問うことができるので、このような問いに取り組むことによって、「そもそも道徳とは何か？」という、最も根本的な問いに対しても、探究を推し進めることが可能となる。」⁽⁵⁾

二 ベームの道徳進化のシナリオ

目次からもわかるように、本書で取り上げられた内容は多岐に亘っているが、本稿では、先に掲げた進化生物学的問いに対する進化人類学的成果に注目し、その点にのみ絞ってみていくことにしたい。

- 1 ベームの道徳起源論の範囲と特徴
- 2 ベームの道徳起源論
 - (1) 六〇〇万年間にヒトと、チンパンジーおよびボノボに生じた道徳的相違
 - (2) ヒトの道徳の発展段階
 - ① 善悪観念の獲得
 - ② 平等社会への移行
 - ③ 利他主義的特質の進化

3 ヒトの道徳進化の現在と未来

1 ベームの道徳起源論の範囲と特徴

著者は、本書で取り上げるテーマの範囲を、「恥 (shame)」「徳 (virtue)」「家族外の人に対する寛容性 (extrafamilial generosity)」「道徳主義的な集団的社会統御 (moralistic group social control)」の進化的発達において、活発に作用したメカニズムに限定し(三三三)、データが許す範囲内で、ダーウィンの全体論的進化的分析を適用して(三二八)、「道徳起源の自然史をより歴史的に構成する」[“make the natural history of moral origins more historical” (三二二)] 課題と取り組みたいと述べている。

2 ベームの道徳起源論

- (1) 六〇〇万年間にヒトと、チンパンジーおよびボノボに生じた道徳的相違
- ベームは、ゴリラ・ヒト・チンパンジー・ボノボの共通祖先に注目し、ゴリラの祖先とヒト・チンパンジー・ボノボの共通祖先が分岐した時点を八〇〇万年前としている。ゴリラの祖先はそのまま今日のゴリラへと進化したが、ヒト・チンパンジー・ボノボの共通祖先は、六〇〇万年前に、ヒトの祖先と、チンパンジー・

ボノボの共通祖先に分歧し現代に至っている(九二)。

六〇〇万年前のヒトの祖先が有していた資質の内、その後の道徳起源・道徳進化と重要な関係を持つものは、次のように記述されている。

協力の程度は現代のチンパンジーやボノボ程度と低く、「利他指数 (altruism quotient)」もごく低かったが、自己意識、視点取得、支配と従属といった能力だけでなく、反階級的・反支配的連携を結成する能力も有しており、母親は子供を共感的に社会化し、子供たちに文化的学習モデルを提供してきた。ベームは、これらの特性を「前適応 (preadaptations)」⁽⁶⁾とらえ、ヒトの道徳進化の構築要素として不可欠であったと考えている(三三〇)。

ヒトの祖先とチンパンジー・ボノボの祖先が分歧してから、すでに六〇〇万年の時間が経過した。この間に生じた、両者の道徳的差異は非常に大きい。ベームは、なぜ、ヒトだけが、「有徳の善」(virtuous good)と「恥ずべき邪悪」(shameful evil)の感覚を獲得し、「利他主義的寛容性を好む」(love of altruistic generosity)ようになり(三二八)、協利行動を黄金律で増幅するようになったのだろうか(三二一―三二二)、と問いを投げかけている。

(2) ヒトの道徳の発展段階

ベームはヒトの道徳進化をもたらした要因を三つ指摘している。第一は、善悪観念の獲得、第二は、平等主義への移行、第三は、利他的特質の進化である。以下、順にこれらの要因を取り上げていこう。

① 善悪観念の獲得

第一の善悪観念の獲得である。

ヒトの祖先には、nonmoralisticな⁽⁷⁾つまり、道徳と無関係な集団的統御能力が備わっていた。この統御能力は、「不快に思われた利己的・競争的・搾取的なフリーライダーとしての「ブリーズ」⁽⁷⁾に向けられた」ことから、その当時の社会が階層構造的なものであったとしても、上位のブリーズの利己的行動は抑制されたであろう(三二二)。

このような前適応をもとに、進化的善悪観念 (evolutionary conscience) が獲得されるのだが、ベームは、これを道徳進化の第一段階としている。もしこの進化的善悪観念の獲得がなければ、ヒトの「自己統御は、報復の恐怖と服従の能力に基礎づけられたものでしかなかったであろう」とされている(三二二)。

ベームは、「原初的善悪観念が発達してくると、ルールが内面

化され、集団の好みに個人の行動を微妙に適合させるようになり」(三二二)、「懲罰的な社会選択 (punitive social election) を通じて「恥の意識 (shameful conscience)」をくくり出した」(三二七)と仮定している。

五万年から一〇万年前には、「現代の善悪観念に近いものが進化したおり、また、これは「ルールと感情的に同一化する (emotionally identifying with rules)」だけでなく「恥ずかしさによる赤面反応 (shameful blushing response)」も伴っていた」として、これを「全面的な道徳感覚 (full moral sense)」の獲得と捉えている (三二二)。

② 平等主義への移行

第二の平等主義への移行を見ていくことにしよう。

ベームは、道徳起源を、初期人類が「階層的に生きてきた種」から「平等主義者の種」に変化することになった、大きな政治的変化と結びつけている。その大きな政治的変化とは、善悪観念の進化と社会統御の強化である——具体的には、集団内の下位集団が横暴な「第一位の男 (alpha-male)」の行動を「禁止する (outlaw)」として、処罰しはじめたことである (三一九)。これに対し「第一位の男」は、攻撃されることへの恐れから、集団を屈

服させるよう駆り立てられたことにより、「怒りに満ちた集団と抑制のかかかっていない支配者との間の身体的衝突は、今日よりもずっと頻繁に生じており、善悪観念 (conscience) に有利な社会選択が強力に推進されていったと思われる」と、道徳進化の第一段階以降の展開を述べている (三二二)。

このような政治的変化をもたらした原因の一つとして、著者は、考古学者メアリー・スタイナー (Mary Stiner) の「人類は、二五万年前に大型動物専門の狩猟者となり、そして、食肉処理様式も社会的に意義深い仕方で変化した」という発見を重視している⁸⁾。ベームは、この狩猟形態の変化が、「決定的かつ文化的な制度化を生み出した」としている (三二九)。

ヒトは、「その時点で、何人か他の狩人メンバーと共にバンドで生きるしか術はなかった」、そして、「狩猟チーム全体が、追跡において、常に多くのエネルギーを費やしていた」ため、彼らにとって、殺した動物の肉の効率的分配は切実な欲求であり、肉の分配における不和 (variance) の減少は、彼らの栄養摂取にとって極めて重要なことであった (三二九—三三〇)。

③ 利他主義的特質の進化

第三の利他主義的特質の進化をみていこう。

ベームはヒトの基本的特性を三つ挙げている。それらは、利己主義 (egoism)、身内びいき (nepotism)、そして「利他指数 (altruistic quotient)」である (三三〇—三三一)。

ヒトの利他指数、つまり、われわれ人類が有している利他主義や協力の度合いは、その強さだけに注目するならば、生物界において独自というわけではない。しかし、「われわれのやり方で、つまり、恥を知り、あるいは、徳の感覚を発達させることによって、われわれのレベルに到達している動物はいらるだろうか？ また他のいかなる動物が、それ自身の利他性を意図的に増幅する上で、協力的社会機能は十分価値があると理解した上で、そうしてきただろうか？」(三二八—三二九)と問い、ヒトの利他主義の独自性を指摘している。

ヒトの利他的特性は、生得的な利己主義や身内びいきと衝突するが、何百万年にも互りヒトはこれら三つの特性間のバランスをとりながら、生得的寛容衝動を増幅し、個人、家族、バンド全体の利益を確保し、現在に至っている (三三三—三三四)。

ベームは、ヒトは「良い評判を得て積極的にフリーライダーを処罰する人物を好んだので、ヒトの遺伝子プールの形成を助け続けたと仮定している」(三三八)と、ヒトの集団で利他主義者が一貫して好まれてきたことは、遺伝子プールに影響を与えたと考え

ている。

「私はさらに次のことを強調しておかなければならない。つまり、そのような表現型の増幅が見通しどおりに実現すると、この意図的インプットはある方向、とりわけ、社会生活を高める利他主義者が一貫して好まれ、他方、けちだったり、破壊的行動をとったりする人が一様に嫌われるという方向に、遺伝的選択過程を「絞る (focus)」ようになる⁶⁾。このように意図を含んだインプットは、われわれの大きな脳によって可能となり、また、ある意味、含まれた意図性は、社会選択に (そして、それゆえ自然選択にも)、一定の「目的的 (purposive)」要素を生み出すことになる。われわれの寛容性の促進は、評判による利他的遺伝子の選択を助け、それと同時に、抑制のきかないフリーライディングをやるブリーズやだまし屋の処罰は、彼らが保持している利己的で攻撃的な遺伝子にとって不利となる。政治的結合が持続する限り、利他主義者が有利となり、また、彼らの遺伝子は遺伝子プールに表象されているので、有利となる。」(三三二)

ベームは、社会選択の効果を認めているが、しかし、「基本的には、われわれの種の進化的「運命 (destiny)」は、偶然に依存してきた……。私は、生物進化の基本に関する限り、途方もない幸運だと確信している」と述べ、このことを、「私は、われわれ

の側の知的意図が、生来道徳的になることを遺伝的に助けてきたかもしれないと論じたが、しかし、われわれは、決して「意図」的にそのようなことを起こしてきたのではないことは確かである。あるいは、われわれは、生態学的に適切な時期には、不確実な基礎に立つ肉の分配システムを連続的に微調整しうるほど賢く、また、本当にせっぱ詰まったときには、それを放棄しうるほど賢い、と私は確信しているが、しかし、われわれは更新世を生き抜けるよう自分自身をデザインしてきたわけではない(三三七)と
いう言い方をしている。

3 ヒトの道徳進化の現在と未来

現代人の道徳の基礎は、四万五千年前、つまり、「文化的に現代化 (become culturally modern) した時期」までには、完成していたと著者は述べ、それにより、「更新世後期に特有の狩猟採集民 (UPA hunter-gatherers) が理解しているような形での道徳生活、また、実際、われわれ自身が理解しているような形での道徳生活は、基本的に完成していた」としている。その道徳とは、「徳の意識 (sense of virtue)」と「恥ずべき犯罪の意識 (sense of shameful culpitude)」の両方を有し、また、「人間の寛容性 (human generosity)」も伴ったものであった(三三三―三三四)。

今日に至るヒトの道徳進化は、「非常に柔軟な力をもった、協力にとつて有効な(しかし、脆い)能力「の獲得」であった」。それゆえ、ヒトは、「今日、狩猟バンドとしてだけでなく、部族として、あるいは、首長制社会としても、さらに、個々の国家としても、効果的に協力できる」能力を有している。しかし、問題は、この道徳が、国家を超えた、「地球共同体で機能するか否か」(三三五―三三六)である。狩猟採集社会で確立された道徳は、人類が直面しつつある新たな道徳問題、たとえば、地球環境問題、国家間の戦争など、国家が構成メンバーとなった地球共同体レベルの道徳問題に対し、解決案を提示していけるのだろうか。著者は、最終章において、その可能性を探っている。

三 むすび―暫定的成果

道徳の科学的研究において、脳神経科学的アプローチと進化心理学的・進化的生物学的アプローチが手を携えることにより、「道徳判断および道徳行動は、どのような具体的・適応的な情報処理問題を解決しようとしているのか?」、「これらの具体的・適応的な問題は、人類の祖先が生活していた環境において、どのような感情的・認知的情報処理メカニズムによって解決されてきたの

か？」等の問題に、光を当てることができるようになると述べておいた。

今回、ベームの進化人類学的研究成果を探究することで、より具体的に、狩猟採集生活を通して道徳がどのようにして獲得されてきたのか、また、その獲得にからむ感情的・認知的情報処理プロセスがどのようなものであったかについても、より深く知ることができた。たとえば、前者に関しては、二五万年前に大型動物専門のシステムティックな狩猟者となったことで、食肉処理様式が変化し、分配様式が効率化され、平等主義的な制度の形成につながったということもあった。また、後者に関しては、善悪観念の進化とともに集団のルールが内面化され、ブリーズやフリーライダーなどのルール違反者を咎めたり、憎んだりする感情的問題を、集団内でどのように処理してきたのかといったことや、ヒトは利他主義者を好み、フリーライダーを処罰しながら世代を重ね、利他的傾向性を進化させてきたといったこともあった。

本書を通じて、われわれ現代人は、このような道徳進化の道歩んできたヒトの子孫なのだということ、また、六〇〇万年の間に狩猟採集生活を通して獲得した道徳が、国を超えたレベルでの道徳問題に対応しきれていないということも、知ることができた。

本書は、道徳の起源を進化人類学の立場から解明しようとしてきた長年に亙る研究の成果というだけでなく、道徳という複雑な対象を科学的に解明しようとした見事な成果でもある。本書は、将来、長きに亙って、道徳の起源・進化研究における最重要文献の一つとして読み継がれていくことになるだろう。

注

(1) 二〇一三年一月一三日、「伊東俊太郎著作集」を読む会」が終った帰り道で、伊東先生から本書の書名の「起源」は「origin」か「origins」かおたずねがあり、改めて「」の重要性に気づかされたので、(1)に記しておく。

(2) 『モラロジー研究』71号、公益財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センター、二〇一三年九月、所収。

(3) Randolph M. Nesse, "How Can Evolution and Neuroscience Help Us Understand Moral Capacities?", Jan Verplaatse, Jelle De Schrijver, Sven Yarnes, Johan Braeckman, Editors, *The Moral Brain: Essays on the Evolution and Neuroscientific Aspects of Morality* (Springer, 2009), p. 203. 日本語訳は、立木教夫・望月文明監訳『モラル・ブレイン：脳科学と進化科学の出会いが拓く道徳脳研究』麗澤大学出版会、二〇一三年九月三〇日、二七九ページ。

(4) Kristin Prehn and Hauke R. Heekeren, "Moral Judgment and the Brain: A Functional Approach to the Question of Emotion and

- Cognition in Moral Judgment Integrating Psychology, Neuroscience and Evolutionary Biology," *Ibid.*, pp. 147-148. 『モートル・ブレイン』二〇一〇年。
- (5) 『モロロジー研究』71号、四五ページ。
- (6) 「ある生物において、以前にはとくに重要でなかった器官や性質が、のちに何らかの(たとえば地質学的あるいは人工的な)原因によって生活様式の変更を余儀なくされた場合、適応的な価値を表わす現象」(『岩波 生物学辞典 第4版』、八〇四―八〇五)
- (7) Bullies, *ブルイーズ* 威張り屋 暴漢、ガキ大将、弱いものいじめなどの訳語が当てつけられる。
- (8) 著者ヘームは次の二本の論文に言及している。
- Stiner, M. C. 2002. Carnivory, coevolution, and the geographic spread of the genus *homo*. *Journal of Archaeological Research* 10: 1-63.
- Stiner, M. C., Barkai, R., and Gopher, A. 2009. Cooperative hunting and meat sharing 400-200 kya at Qesem cave, Israel. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 106: 13207-13212.
- (9) 「わたち」原注④] *ボーム* Boehm, C. 1976. Biological versus social evolution. *American Psychologist* 31: 348-351; —, 1991a. Lower-level teleology in biological evolution: Decision behavior and reproductive success in two species. *Cultural Dynamics* 4: 115-134; —, 2008b. Purposive social selection and the evolution of human altruism. *Cross-Cultural Research* 42: 319-352.

参考文献

- Christopher Boehm, *Moral Origins: The Evolution of Virtue, Altruism, and Shame*, Basic Books, 2012.
- Jan Verplaise, Jelle De Schriever, Sren Yanneste, Johan Braeckman, Editors, *The Moral Brain: Essays on the Evolution and Neuroscientific Aspects of Morality*, Springer, 2009, 立木教夫・望月文明監訳『モータル・ブレイン：脳科学と進化科学の出会いが拓く道徳脳研究』麗澤大学出版会、二〇一三年九月三〇日。
- Michael S. Gazzaniga, *Human: The Science Behind What Makes Us Unique*, HarperCollins Publishers, 2008, 柴田裕之訳『人間らしさを何か。——人間のユニークさを明かす科学の最前線』インターシフト、二〇一〇年二月。
- 鈴木光太郎『ヒトの心はどう進化したのか——狩猟採集生活が生んだもの』ちくま選書、二〇一三年。